



たてやま おらがんまつち

2019.2 No.40

南総祭礼研究会



芝崎

館山市那古地区

- 地区名 … 芝崎
- 上幕 … 注連縄
- 制作年 … 明治三十以前
- 神社名 … 日枝神社
- 大幕 … 雲に唐獅子牡丹図
- 提灯 … 芝崎に桜花
- 半纏 … 芝崎の大紋



こだわりの扱いをしている

檣の桁

芝崎自慢のひとつです。人形は天照大神でそのすらりとした気品あるたち姿と慈愛に満ちたまなざしは見る人を魅了します。

また高欄を上げる際の人形と高欄が一緒に上がる仕組みは今まで昔も変わらない仕組みになっています。

平成二十八年に新調した檣の檣の扱いには、トクサで磨いて真綿で仕上げ蜜蠟（みつろう）をすり込むというこだわりをもつて、平成二十九年には大幕とどろ幕を新調しました。また山車全体の骨組みも修復しましたが、山車の寸法を昔と変えないことにこだわった結果、美しいバランスのとれた自慢の山車は健在です。

那古寺の境外仏堂で寺領区域内の「芝堂」と呼ばれる墓地には、全国各地から商人が集まってきたとみられる「大和屋」、「越後屋」などの墓碑銘が数多く見受けられます。

毎年一月の第二日曜日に区内十一班が持ち回りで「おびしゃ」が集会所で行われます。古式に則り、入口に「山王大権現」、「千手觀音菩薩」と書かれた幟を立て、集会所の床の間を背に右から「千手觀世音」「日吉山王宮」「千手觀世

前町としてもおおいに栄えていました。那古山の南側に位置する地区で、江戸時代には那古寺の寺領であり寺赤、宿、芝崎地であり、また、那古寺の門前町としてもおおいに栄えていました。

地域の自慢

音菩薩」と書かれた三幅の掛け軸を前にして行われます。区

所有の有文書には、江戸時代の貴重な「おびしゃ」の記録が多く残されており、また十五日講と呼ばれる昔からの行事も受け継がれています。

昭和の頃までは、職人さんが多く住まっていた地区で、明寿会、壮年会、青年団、さくら会、子供会などの組織をもとに、百十五世帯余りの人々が暮らす、古い仕来りが受け継がれている

自慢の山車

廻すために舵棒を90度曲げることのできる仕組みに変わっています。

山車彫刻は囃子座の上で

翼を大きく広げた鳳凰が前

方を見守り、前柱の相生の

松、上に鶴、下に高砂の尉と姥

が立つ姿、下高欄胴

の亀など、おめでた

い彫刻が主体となっ

ており四隅の金剛

力士の彫刻も豊か

な表情で見ると人た

ちを飽きさせない、

けようと山車全体が小ぶりになつています。昭和二十二年までは固定式一本棒の舵棒をつけていましたが、現在では狭い道を曳き

の山車の中でも小ぶりながらもバランスの美しい山車で、明治三十年そもそも芝崎町内は狭い道が多く、町内の隅々までお祭りを届けようとしています。そもそも芝崎町内は狭い道が多い、町内の隅々までお祭りを届けようと山車全体が小ぶりになつています。昭和二十二年までは固定式一本棒の舵棒をつけていましたが、現在では狭い道を曳き

の山車彫刻は囃子座の上で翼を大きく広げた鳳凰が前方を見守り、前柱の相生の松、上に鶴、下に高砂の尉と姥が立つ姿、下高欄胴の亀など、おめでたい彫刻が主体となつてあります。昭和二十二年までは固定式一本棒の舵棒をつけていましたが、現在では狭い道を曳き

の山車彫刻は囃子座の上で翼を大きく広げた鳳凰が前方を見守り、前柱の相生の松、上に鶴、下に高砂の尉と姥が立つ姿、下高欄胴の亀など、おめでたい彫刻が主体となつてあります。昭和二十二年までは固定式一本棒の舵棒をつけていましたが、現在では狭い道を曳き

初代後藤義光作の力士彫刻



囃子座前柱の「高砂」